岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

理科・数学教師の教材開発能力を向上させる推測型ＷＢＴ学習コンテンツの開発と評価

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益子, 典文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/721

はしがき

近年，e-Leatningという用語が市民権を得て，様々な場所で一般的に使われ始めている。一般に受け入れられているそのコンセプトは「いつでも」「どこでも」学習を展開できるということであろう。つまり，コンピュータネットワークの社会的基盤が整備されることにより，これまでは対面が基本であった教授活動／学習活動が時間的・空間的制約から解放されるというコンセプトである。

一方で，初等教育から高等教育までを対象とした教育改革の流れは，それぞれの学校段階の教師の立場も変容させつつある。特に近年，教師の資質能力の向上が課題となってきており，その課題と「いつでも」「どこでも」学習できるe-Learning環境の整備とは容易に結びつけることができる。しかもこの分かりやすい解決の枠組みであると言えよう。

しかし，私は，本当に教師の立場から考えるのであれば，もう一歩踏み込んだ議論が必要だと思うのである。例えば,「いつでも」「どこでも」学習できる環境下では，教師は働きながら学ばねばならない。働きながら学ぶことのメリットとは何だろうか?。また,「いつでも」「どこでも」学習できる環境下では，教師は学費を自ら支出しなければならないが，修士号や専修免許を取得するメリットは制度化されていない。それでも，学習を希望する教師は少なくないのである。学習を希望する教師の動機は，どのような基盤に根ざしているのだろうか?。このような問いをじっくり考えることが，教師のための遠隔学習，e-Learningには必要だと思うのである。

私は，昭和63年12月に鳴門教育大学へ奉職して以来，全国から大学院へ派遣されてくる小学校，中学校，高等学校の現職教員との対話の中で，学校の教師の立場だからこそ成立する合理的な思考方法にしばしば出会ってきた。そのような思考に合致し，しかも現職の教師だからこそ学ぶ価値のあるコンテンツや教育方法とは，どのようなものなのか。

本研究は当初，そのような疑問から，鳴門教育大学の若手教官数名で，平成13年度からスタートしたプロジェクトである。当初は手弁当で始まったプロジェクトであるが，平成14年度から3ヶ年，本科学研究費補助金を獲得することができ，様々な試みをすることができた。その試みの中には，現職教員大学院生との共同研究を学習コンテンツに展開し，さらに講義の充実を図る試みや，私自身が学校や教育委員会と協働（collaboration）する中から得た様々なノウハウをコンテンツ化する試みが含まれている。

研究代表者である私自身が教師のための遠隔学習の「現場」に身を置く気持ちを抑えることができず，プロジェクト2年目の平成15年度には，岐阜大学へ転出することとなった。その「現場」では，実際に夜間遠隔大学院で働きながら学ぶ現職の教師たちと対峙することとなったが，鳴門教育大学のメンバーとともに試みたことは間違っていなかったことを実感している。

研究は3年間の研究期間を終えようとしているが，現職教師が働きながら学ぶ中で価値を見出すことができる学習をどのように実現して行くのか，今後さらに充実を図っていきたいと考えている。

研究代表者　益子典文